

日本消化器外科学会雑誌編集後記

早いもので本誌編集委員を拝命して6年が過ぎようとしています。編集委員の任期は6年ですので、私が担当する編集後記は今回が最後になります。商業誌とは異なり学会誌の編集委員は当然のことながら全くのボランティアで、また本誌は主として投稿論文で構成されているため、査読本数が多く、委員会自体よりも査読のために毎月かなりの時間を（私ばかりではなく教室員や秘書も）費やしました。正直に言ってかなりの負担でしたが、編集委員のみならず、事務スタッフを含めた関係者全員の熱意に支えられて、6年間続けることができました。関係各位に心から感謝申し上げます。

本誌は『Top publications in Japanese (和文ジャーナル上位100誌)』で医学系雑誌では1位（全体では2012年4月8位, 2012年11月13位）を堅持しており、評価の高い邦文誌ですが、投稿者から見ると、少しハードルが高いと感じるかもしれません。掲載のためには、希少性、新奇性、治療の的確性などを満たしている必要があります、2011年度23.2%、2012年度23.5%の採択率が示しているように、確かに採択されるのは簡単ではありません。しかしながら、編集委員はきちんと書かれた論文はなんとか採択してあげたいという思いを共有しており、厳しい査読結果が示された場合でも、他の委員から別の見解が示され、最終的に「もう一度読みましょう」という結論になることも少なくありません。また、不採用の場合も査読結果を著者にフィードバックすることで、次回の論文作成時や他誌への投稿に役立てていただいています。

論文を作成することはいうまでもなく、著者の能力を高めます。例えば症例報告の場合、希少性を確認し、治療経過の妥当性や問題点を洗い出し、診療の向上に繋がるような考察をするという作業により、実臨床で重要な科学的、論理的な思考力が涵養されます。若い先生方は臆さず、積極的に本誌に投稿してください。ただ投稿の際には、文献検索を十分行い、構想を練ってから論文を書き、十分推敲し指導者のチェックを受けた後に、投稿規程に従って論文を投稿されるようにお願いします。

編集委員会は次世代の先生方に引き継がれ、いずれは編集会議もWeb会議など時代に合った形に変化してゆくのかもしれません。しかし、一級の邦文医学誌で在り続けるためには、論文の質の担保と編集委員の熱意が車の両輪であることに何ら変わることがなく、互いの関係が深化してゆくことでますます読者に資することを願っています。

(今野 弘之)

2013年7月1日